

山本 尚子
奈良大学

要旨

同一の表現を反復させる修辞技法であるトートロジー（同語反復）にはさまざまなタイプのものがある。その中でも、A に形容詞や動詞を用いた「A ことは A」に関する研究はまだ手つかずのところが多く、従来の研究では、その解釈プロセスに関する一般化はほとんど行われていない。フィルモア(1989)や大石(2015)は、「A ことは A」と逆接の接続助詞「が」で結びつけられる後続節をひとまとまりの構文にとらえ、分析を行っている。だが、具体的な文脈の中で用いられている事例を考察すると、彼らの分析の問題点が明らかになる。本研究では、単独で生起する「A ことは A」（A には形容詞または動詞が入る）を分析対象とする。本稿の目的は、「A ことは A」の解釈メカニズムを明らかにし、その解釈プロセスにおいて、対比という概念が重要であることを示すことである。発話解釈理論の枠組みとしては、関連性理論（Sperber and Wilson (1986/ 1995²））を採用する。

1. はじめに

同一の表現を繰り返しても、有意味であると解釈される反復表現、すなわち、トートロジー（同語反復）にはいろいろなタイプがある。例えば、瀬戸(1997: 64-65)は、(1a)-(1f)のような 6 つのタイプを挙げている。

(1) a. A は A

例) 子どもは子どもだ

b. A か A でないか (のどちらか)

例) 彼は来るかも知れないし来ないかも知れない

c. A ならば A

例) 負けたのなら負けたのだ

d. A のときは A

例) やるときはやる

e. A だから A

例) 好きだから好き

f. A なものは A

例) いいものはいい

また、牧原(2017)は、(1a)のようなタイプを「コピュラ型」とし、A に名詞を用いた「A は A だ」タイプと A に形容詞あるいは動詞を用いた「A ことは A」タイプがあると述べている。

本稿では、反復表現の一つである「A ことは A」（A には形容詞または動詞が入る）の解釈メカニズムを明らかにし、その解釈プロセスにおいて、対比という概念が重要であることを

示す。発話解釈理論の枠組みとしては、関連性理論 (Sperber and Wilson (1986/ 1995²⁾) を採用する。

2. 先行研究検証

本節では、当該表現形式に関する先行研究を概観する。いわゆる「コピュラ型」のうち A に名詞を用いた「A は A (だ)」という表現形式に関する研究は、日本語、英語にかかわらずさまざまな観点から盛んに行われ、発展してきている。しかしながら、「A ことは A」という表現形式については、ある特定の意味を持つ慣用表現の一つととらえられることが多く、その解釈プロセスの一般化を試みようとする分析はあまり多くない。また、一般化を試みようとした分析であったとしても、記述量が少なく、その分析の全体像がはっきりと示されているとは言い切れない。ここでは、フィルモア(1989)、大石(2015)の分析を取り上げ、その問題点を指摘する。

フィルモア(1989)は、「A ことは A」と逆接の接続助詞「が」で結びつけられる後続節を一つのまとまりととらえ、(2)から(4)のような例を挙げている。

(2) スタンフォードのキャンパスは、広いことは広いんですが、少し殺風景です。

(3) 今晚のパーティーに行くことは行きますが、少し遅れると思います。

(4) この本を読んだことは読んだんですが、あまりよくわかりませんでした。

(フィルモア(1989: 21)、下線は筆者)

(2)では、形容詞「広い」、(3)では、動詞の現在形「行く」、(4)では、動詞の過去形「読んだ」がそれぞれ、A の部分に該当する。彼の分析によると、当該構文は、「A ことは A」によって表される真実性を認めると同時に、それから相手が当然期待するであろうことを打ち消すという語用論的な特徴を有し、「A という述語から相手が期待することを、最低限のものに止めさせる機能」(p. 21)を持つ。このような分析は、フィルモアが、当該表現形式の解釈プロセスに、語用論的な側面がかかわっていると考えていることを示している。

大石(2015)は、このような語用論的な情報が必要である理由についてフィルモアは何も述べていないと批判している。そして、その語用論的な特徴づけの理由として、「A という表現が繰り返されているという冗長性が、M 推意を誘発し、たとえば「読む」という行為から当然 I 推意されるステレオタイプの状況が、M 推意によって否定されている」(p. 39)ということが考えられると主張している。大石は、Levinson (2000)の 3 原理に基づき、「A ことは A」の解釈プロセスを説明しているが、先に述べた数行ほどの記述しかないため、その全体像がはっきりとしない。そのため、ここで、大石の分析をもう少し整理しておきたい。まず、M 推意とは様態に関わる M 原理に基づき引き出される推意のことである。聞き手側の M 原理では、普通ではない、有標な表現が用いられた場合、それは普通ではない、有標な状況を示していると考ええる。また、I 推意とは情報性に関わる I 原則に基づき引き出される推意のことである。聞き手側の I 原理では、最も具体的な解釈を見つけ出し、話し手が最小化の格率（「伝達目的を果たしうる最小の言語情報を与えよ」）に違反している場合を除き、話し手の発話の情報内容を増幅すると考える。このような点を踏まえると、先の大石の分析は、< 「A ことは A」の解釈プロセスでは、例えば「読む」という行為に伴う、普通のステレオタイプの解釈、つまり、I 推意が引き出されるはずであるが、「読む」という語を繰り返すと

いう冗長的な有標表現が用いられているので、I 推意が引き出されずに、普通ではない、有標な状況を示すという M 推意が引き出される > と言うことができる。このように、大石の分析を整理すると、彼の分析は、Levinson (2000) の 3 原理に沿って説明しているだけで、「A ことは A」という表現形式に特有な側面については何も述べていないことがわかる。

フィルモア(1989)や大石(2015)は、以上のような見解を述べているが、両者の分析にはいくつか問題点がある。まず第一に、具体的な文脈を伴う事例を考察していないために、「真実性」や「相手が当然期待するであろうこと」、「ステレオタイプの状況」が具体的に何を意味するのか明確ではない。第二に、「打ち消す」、「相手が期待することを最低限のものに止めさせる」といった語用論的な機能がなぜ、どのように引き出されるのか不明である。第三に、フィルモアも大石も同じ事例を分析対象としているが、当該構文が何らかの否定的な意味を持つのであれば、それは「A ことは A」という表現形式によるものであるのか、あるいは、逆接の接続助詞によるものであるのかという点が彼らの分析でははっきりとしていない。最後に、先に挙げた(2)-(4)は「A ことは A」という形式を持つデータの一部であり、フィルモアや大石の分析を当該表現形式の総合的な分析と見なすことができない。実際に Google の検索オプション等を用いて事例を収集すると、以下のような、先の事例とは異なるタイプのものも見つかる。

(5) ららぽ (ららぽーと) もわりと広いので歩き疲れますよ。イオンよりはもっとぎゅっと圧縮してるので敷地的にはららぽの方が小さいのかな？まあどちらも似たようなものです！広いことは広いです！

(<https://achikochi.mamari.jp/questions/9548206>、下線は筆者)

(6) 「うまく行く？そりゃあ、うまく行くことは行くだろうよ、すらすらとね。でもそれじゃ簡単すぎて、まるでおもむきがないよ。そんなにお手軽な計画に何の値打ちがある。…」

(刈田元司訳『ハックルベリー・フィンの冒険』、下線は筆者)

(7) しかし困ったことも。

「疲れた」

「私は鍛えているから、そんなにたいしたことないけど、遠いことは遠いね」 (客)

新ターミナルへのアクセスは、名鉄の空港駅の改札から動く歩道を使った場合、徒歩約 10 分。550 メートルの距離を歩く必要があります。運賃などは安いものの、体への負担はかかります。
(<https://www2.ctv.co.jp/news/2019/09/20/65701/>、下線は筆者)

例えば、(5)では、「広いことは広いです」と、「A ことは A」という表現形式が単独で用いられている。このような単独の用法は、(6)のように、A の部分に動詞が用いられている場合にも見られる。また、(7)では、(2)-(4)とは異なり、「けど」という接続助詞の後に、「遠いことは遠いね」と、「A ことは A」という表現形式が続いている。このように、フィルモアや大石が扱った、「A ことは A」と逆接の接続助詞「が」で結びつけられる後続節を一つのまとまりととらえたものは、「A ことは A」という表現形式を持つデータの一部であると言える。

3. 考察

本節では、前節で指摘した先行研究の問題点を踏まえ、新たな分析法を提示する。本研究では、単独で生起する「A ことは A」を分析対象とする。

まず、(8)-(10)のような、A の部分に形容詞を用いた事例から考えていきたい。

- (8) ららぼ (ららぼーと) もわりと広いので歩き疲れますよ。イオンよりはもつとぎゅつと圧縮してるので敷地的にはららぼの方が小さいのかな？まあどちらも似たようなものです！広いことは広いです！ (= (5))
- (9) ムシャムシャムシャ・・・うまいことうまい。ガーリックが効いています。ジューシーで香ばしいチキンとピリ辛いペッパーパウダーのコラボがイイですね。辛さの方は・・・辛党の私からすればそんなに辛く無いですが辛いのが苦手な人でも食べられるでしょう。評価は☆3つ。

(<https://humans-blog.com/category/%e3%82%b0%e3%83%ab%e3%83%a1/>、
下線は筆者)

- (10) ご存知でだったでしょうか・・・ウキペディアで、江津市と検索してみると、東京からの移動距離が全国で一番遠い都市(2007年)として知られており高等学校の「地理A」の教科書や、テレビ番組でも取り上げられた。
と記載がありました。確かに、遠いことは遠い・・・東京から実家に来た友人は、「えらい時間がかかった・・・」と言っていたのを思い出しました。

(<http://40th-gochu1975.blogspot.com/2014/10/blog-post.html>、下線は筆者)

例えば、(8)は、インターネット上の掲示板に寄せられた、ある商業施設の広さに関する質問に対する回答である。質問者は、以前訪れたことがあるイオンモール幕張新都心があまりにも広すぎて回りきることができなかった。そのため、今度訪れる予定であるららぼーと TOKYO-BAY の広さについて、両商業施設を訪れたことがある人に対して質問をしている。このような文脈において、「広いことは広いです」は、<ららぼーと TOKYO-BAY は、イオンモール幕張新都心よりも小さな敷地にコンパクトにまとまっているが、それでもなお(敷地面積が)広い>と解釈することができる。(9)は、シャカシャカチキンレッドペッパー味という、あるハンバーガーチェーン店の商品に関する感想を述べたブログからの引用である。このような文脈において、「うまいことうまい」は、<シャカシャカチキンレッドペッパー味は、辛いのが苦手な人にとっては辛い(かもしれない)が、それでもなおうまい>と解釈することができる。(10)は、ある中学校の同窓会のブログからの引用である。島根県江津市は、東京から鉄道で移動する距離が全国で最も遠い都市として知られている。このような文脈において、「遠いことは遠い」は、<島根県江津市は、日本一であるが、それでもなお(東京からの移動時間距離が)遠い>と解釈することができる。以上の考察を踏まえると、単独で生起する「AことはA」(Aは形容詞)は、それによって伝達されるものが、発話時点で話題になっている対象は、Aという性質と対立する側面を持つが、それでもなおAという性質を持つと解釈されなければならないことを指示すると一般化することができる。

次に、(11)、(12)のような、Aの部分に動詞を用いた事例について考える。

- (11) 「うまく行く？そりゃあ、うまく行くことは行くだろうよ、すらすらとね。でもそれじゃ簡単すぎて、まるでおもむきがないよ。そんなにお手軽な計画に何の値打ちがある。…」 (= (6))
- (12) 以前購入したアームバンドをさらに活用するため自分の使用目的にあったハンズフリーがないかと楽天ショップを物色。一応、Bluetoothのハンズフリーを持っていることは持っているんです。以前購入していた mobilecast の mLink R for P902i という機器です。docomo の P902is が Bluetooth 搭載だったのでハンズフリーにして使っていたのですが

その後購入した携帯には Bluetooth が搭載されていなかったのでお蔵入りになっていました。
(<https://plaza.rakuten.co.jp/egulog/diary/201206170000/>、下線は筆者)

例えば、(11)では、トムが、ハックが考えた黒人奴隷ジムとの逃亡計画について話をしている。このような文脈において、「(うまく) 行くことは行くだろうよ」は、<物事がうまく進むと充実感が得られるが、ハックが考えた黒人奴隷ジムとの逃亡計画はうまく進むだろうが、充実感は得られない>と解釈することができる。(12)は、あるブログからの引用である。ブログの筆者は、スマートフォン用のアームバンドを活用するために、手を使わないで操作できるハンズフリーの機器を探している。このような文脈において、「(Bluetooth のハンズフリーを) 持っていることは持っているんです」は、<自分自身のものであるものを持っていると利用することができるが、(ブログの筆者は、) 自分自身のものであるものとして当該 Bluetooth を持っているが、利用することができない>と解釈することができる。以上の考察を踏まえると、単独で生起する「A ことは A」(A は動詞) は、それによって伝達されるものが、文脈にすでに存在する A に関する想定から引き出される帰結と反対のものとなるように解釈されなければならないことを指示すると一般化することができる。

このように、具体的な文脈の中で「A ことは A」の解釈プロセスを明らかにしていくと、「A ことは A」の解釈プロセスには、語用論的な推論に基づく何らかの対比が関係していると言える。A が形容詞の場合は、ある 2 つの性質の間に対比が認められる。例えば、(8)では、「イオンモール幕張新都心よりも小さな敷地にコンパクトにまとまっている」という性質と「(敷地面積が) 広い」という性質の間に対比が見られる。A が動詞の場合は、文脈にすでに存在する A に関する想定と「A ことは A」によって伝達されるものとの間に対比が認められる。例えば、(11)では、「物事がうまく進むと充実感が得られる」という文脈既存の想定と「ハックが考えた黒人奴隷ジムとの逃亡計画はうまく進むだろうが、充実感は得られない」という「(うまく) 行くことは行くだろうよ」によって伝達されるものとの間に対比が見られる。

4. 「A ことは A」とそれに対応する英語

本節では、以上の考察を踏まえ、「A ことは A」とそれに対応する英語について考える。フィルモア(1989)は、具体例を挙げていないが、自身が考察対象とした構文に対応する英語として、(13)に示すような、but で先行節と後続節をつなぐ形を提示している。また、「A ことは A」の特徴の一つとして、同じ語が繰り返されていることを挙げ、(他の構文も引き合いに出しながら、) 日本語では、繰り返しを使用頻度の高い重要な技法であるのに対して、英語では、繰り返しという技法はあるものの、その使用頻度はあまり高くないと述べている。

(13) ... IA ... but II

(フィルモア (1989: 20)、一部修正引用)

実際に検索してみると、フィルモアが示した対応関係に合致する事例がある。例えば、(14)と(15)はそれぞれ、*The Hound of Baskerville* の日本語訳とその部分に対応する英文である。これらは、ホームズによる発話であり、モーティマー医師が、持参したチャールズ・ヴァスカビル卿の死に関する新聞記事を読み終わった後に発せられたものである。

(14) あのおり新聞論評で読んだことは読んだのですが、ヴァチカンのカメオ浮彫りのちょっとした事件にかかりっきりで、法王を安心させたいと熱中もしていたもので、イギリスでのおもしろ

そんな事件にも、うわのそらだったわけでした。

(阿部知二訳『ヴァスカビル家の犬』、下線は筆者)

- (15) I had observed some newspaper comment at that time, but I was exceedingly preoccupied by that little affair of the Vatican cameos, and in my anxiety to oblige the Pope I lost touch with several interesting English cases.

(Doyle, Conan, *The Hound of Baskerville*, 下線は筆者)

もし今までの議論が正しければ、(14)の下線部「読んだことは読んだ」は、<有能な探偵は死亡記事を読むとそれに注意を払うが、(シャーロック・ホームズは、) チャールズ・ヴァスカビル卿の死亡記事を読んだが、それに注意を払わなかった>と解釈することができる。一方、あるインフォーマントは、(15)から、“I (= Sherlock Holmes) noticed the obituary and realized it was important, but didn't spend the time to pay close attention to it or to follow up”というニュアンスを感じるという。また、このような文脈では、シャーロック・ホームズは、チャールズ・ヴァスカビル卿の死亡記事をもっと注意深く読むべきだったし、通常の場合ならば、そうしていたであろうが、実際はそうしなかったと考えていることがかなり明らかであるとも言う。このような点を踏まえると、(14)と(15)は(ほぼ)同じ内容を伝達していると言えるが、フィルモアが指摘するように、英語の事例では見られない、同一語の繰り返しが日本語の事例では見られる。これは、日本語の反復表現の特殊性を示唆していると言える。

しかしながら、フィルモアが言う対応関係がいつも成立するとは限らない。例えば、(16)-(18)はそれぞれ、*The Adventures of Huckleberry Finn* の日本語訳とその部分に対応する英文である。(16)と(17)には、先に見た(14)と(15)のような、形式上の対応関係が認められる。それに対して、もう一つの日本語訳である(18)では、「行く」という同じ語を繰り返すという技法は用いられていない。このように、同じような文脈であったとしても、反復表現が用いられる場合とそうではない場合があるので、当該表現形式の使用効果については、今後検討すべき課題としたい。

- (16) 「うまく行く？そりゃあ、うまく行くことは行くだろうよ、すらすらとね。でもそれじゃ簡単すぎて、まるでおもむきがないよ。そんなにお手軽な計画に何の値打ちがある。…」 (= (11))

- (17) “Work? Why, cert'nly it would work, like rats a-fighting. But it's too blame' simple; there ain't nothing to it. What's the good of a plan that ain't no more trouble than that? …”
(Twain, Mark, *The Adventures of Huckleberry Finn*, 下線は筆者)

- (18) 「うまく行くかだって？もちろん、うまく行くにきまっているさ。鼠の喧嘩のようにパタパタッと方がつくよ。だが、それじゃ、あんまり簡単すぎて、面白みが全然ないじゃないか。…」

(村岡花子訳『ハックルベリイ・フィンの冒険』)

5. 結論

本稿では、反復表現の一つである「A ことは A」という表現形式の解釈メカニズムについて議論した。これまでの議論に基づくと、第一に、単独で生起する「A ことは A」(A は形容詞)は、それによって伝達されるものが、発話時点で話題になっている対象は、A という性質と対立する側面を持つが、それでもなお A という性質を持つと解釈されなければならないことを指示すると一般化することができる。第二に、単独で生起する「A ことは A」(A は動詞)は、それによって伝達されるものが、文脈にすでに存在する A に関する想定から引き出される帰結と反対のもの

となるように解釈されなければならないことを指示すると一般化することができる。第三に、先の2点から、「AことはA」の解釈プロセスには、語用論的な推論に基づく何らかの対比が関係していると言える。

参考文献

- Blakemore, Diane (2000) "Indicators and Procedures: *Nevertheless* and *But*." *Journal of Linguistics* 36, 463-486.
- Carston, Robyn (1998) "Informativeness, Relevance and Scalar Implicature." In Robyn Carston and Seiji Uchida (eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, 179-236. Amsterdam: John Benjamins.
- Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- フィルモア、チャールズ (1989) 「「生成構造文法」による日本語の分析—試案」久野暲・柴谷方良 (編) 『日本語の新展開』 11-28、東京：くろしお出版。
- Grice, Herbert Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 服部匡 (1988) 「反復を含む構文の性質について—日本語は文脈自由文法で記述可能か?—」 『言語学研究』 7, 185-200.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 牧原功 (2017) 「日本語の繰り返し表現について—繰り返し表現の類型化と意味の派生のメカニズムを考える」 『日本語コミュニケーション研究論集』 6, 15-24.
- 大石亨 (2015) 「尺度導入表現が引き出す推論パターン—連体詞「大の」「大した」と取り立て詞およびトートロジーとの共通性—」 『日本認知言語学会論文集』 15, 31-43.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』 東京：大修館書店。
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』 東京：海鳴社。
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986/ 1995²) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

例文出典 (Google の検索オプションを用いて収集した例文以外のもの)

村岡花子 (訳) (1959) 『ハックルベリイ・フィンの冒険』 東京：新潮社。